

PICK UP MOVIE

『私のはなし 部落のはなし』

[2022 年／日本／205 分]

監督：満若勇咲 プロデューサー：大島新

撮影：辻智彦 編集：前嶋健治

整音：高木創 音楽：MONO

語り・テキスト制作：采奈菜子

なぜ差別は なくなるのか



部落問題は話題にしづらい。複雑すぎて、うかつに手を出せない感じがあるのだ。けれどこの映画に出てくる部落出身者や関係者は、みな顔も実名も出して、よく喋る。彼らの、時にユーモアを交えながらの真摯で率直な会話こそが、この作品の最大の美点だ。ひとりひとりの感情の機微が伝わり、人生が浮かび上がってくる。こういう場を作り出した満若勇咲監督に敬意を表したい。

会話の内容は、差別に対するあからさまな怒りより、日常的なさりげない出来事が多い。そうした私的な話に引き込まれるのは、その背後に不当な差別に苦しんで真剣に考え続けた分厚い時間があるからだ。語られるエピソードから、差別というものが心に与える深い傷、彼らが日々抱き続ける不安が見えてくる。

そういう語りと併行して、部落研究者が中世から現代に至るまでの被差別部落の歴史を説明していく。国は差別解消を唱えたかと思うと、危機を乗り切るために人々の差別感情を利用したりもした。つまり時の政府にとっての利益が優先され、本質的な差別解消策が打ち出されない点は、マイノリティーや女性に対する差別などと同じだ。天皇制と部落差別の関係にも、研究者は言及する。天皇を頂点とした貴から賤への序列を作るものとして、日本社会では家柄や血筋という虚構が持ち出される。被差別部落をなくせない社会は、天皇制を支えている社会でもあるのだ。

登場人物のひとり、反差別活動が続けてきて、部落への酷い中傷にも冷静に意見を述べる男性が、こういう意味のことを言っている。「被差別部落にルーツを持たない人たちのなかから、差別をなくそうという動きが出てきてほしい」。この映画を見て、いまこそまさにその時だと思った。部落問題をなんとか克服できたら、それは日本社会に閉塞感をもたらしている闇を切り開く道へとつながるのではないか。この映画上映が、そんな動きを醸成していったほしいと願うばかりだ。

田村志津枝プロフィール：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入・上映。1983年からホウシャオシエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。